乳幼児期の子の痛みに言及する母の発話の文末形式

永須実香
（上智大学言語教育研究センター）

目的

母子関係は,共生状態から自他分化状態へのプロセスをともに歩みながら,変化していくとされている（山田 1982,浜田 1995,鯨岡 1997 など）。日本語は,聞き手に対する配慮を文末に付加する要素によって表現し分ける構造をもった言語であるから,乳児期の子に対する母の発話の文末要素にも,発達に応じた変化が見られると推測される。

永須（2022）は,ある母が子の 1 歳期に,文末にノを付加した文を多用して,子の内面（感覚,感情,意志等）に言及することを明らかにした。財部（2023）は,表出が乏しいとされている自閉症スペクトラム（ASD）児に対して,保育士が適切なタイミングで促すことで,子による痛みの表出が可能になった事例を紹介しており,身近な大人による子の痛みへの言及に関する研究の重要性を示唆している。

日本語話者の養育者は,子の「痛み」に,どのような文末形式を用いて言及しているのか。それらは,発達のプロセスに応じて変化するのか。ある一組の母子の会話を縦断的に記録した公開資料を用いて,母が子の痛みに言及する発話の文末形式の変化を探った。

調査方法

CHILDES（MacWhinney,B.2000）に収録された NINJAL-Okubo のデータベースを用いて, 母の発話データを採取した。これには, 国立国語研究所（1982a,1982b,1983a,1983b）の 1974 年生まれの第一子男児（T 児）とその母との発話のデータが電子化されている。分析ソフト CLAN（MacWhinney,B.2000）を用いて, 母の発話文の全てを抜き出し, 次に, そのうち, itai,itaiitai,itakatta,itaku を含む文を抜き出した。分類にあたっては, 国立国語研究所（1982a,1982b,1983a,1983b）を見て, 前後の文脈を参照した。国立国語研究所内で視聴可能な音源資料を聞いて, 文末のイントネーションを確認した。

データの分類にあたっては, 文末付加要素の種類と疑問文の要素（疑問詞, 上昇イントネーション）の有無に着目した。

調査結果・考察

表 1 に結果を示す。表中の「下降」「上昇」は文末イントネーション, 「無」は「痛い」「痛かった」のように文末付加要素がないもの, 「含疑」は「どこが痛い」のように文中に疑問詞を含むもの, 「ノ」は「痛いの」のように文末にノがつくものを表す。「でしょう等」にその他の要素をまとめた。表 2 は, 1 歳台のデータを、T 児が自ら「イタイ」と発話し始める 1;08 の前と後に分けて示したものである。

母による T 児の痛みへの言及は,T 児の「痛い」発話開始以前からあることが確認され,1;08 に子が自ら「痛い」と発話し始めて以降,4 ヶ月ほどの間に,文末にノを付加した形式の言及が急増すると分かった。T 児の「痛い」という発話に対して母は,「（どこが）痛いの（↓or↑）」と繰り返し反応し,子自身による痛みの表出を促していた。また,子の痛みをあたかも自分の痛みのように「痛い↓」と発話する例（通常,対成人では日本語文法的に誤用とされる文）が 1 歳台に多いこと,3 歳台には「痛い（の）」の下降イントネーションの発話が減少,「痛い（の）」以外の「でしょう等」による言及が増加することは、母子の共生から分化へという関係の変化が言語的に文末形式に反映されていることを示すと考える。

表 1

	1 歳台		2 歳台		3 歳台	
	下降	上昇	下降	上昇	下降	上昇
無	8	6	2	0	0	7
無・含疑	0	6	0	0	0	0
ノ	19	23	0	4	1	3
ノ・含疑	4	7	1	0	0	1
でしょう等	4	3	4	1	10	0

表 2

	1;02～1;07		1;08～1;11	
	下降	上昇	下降	上昇
無	3	0	5	6
無・含疑	0	3	0	3
ノ	4	2	15	21
ノ・含疑	0	0	4	7
でしょう等	0	0	4	3

＊会話文の実例, 参考文献の詳細は, 当日配布の資料に記載する。

凡例

①②④⑥：付加要素なしの発話
⑤⑦　　：ノを付加した発話
③⑥　　：「どこ」等、疑問詞を含む
↑or↓　：文末イントネーションの上昇、下降

(1)　　(1;04)(注1)［7.16-39］(注2)
T：ン、ンー
母：ねんねなの？あ、コーンして。痛い痛い↓① 大丈夫？大丈夫ですか？痛かった↓② どこ痛かった↑どこ痛かった↑③
T：ン
母：そこ痛かった↓④

(2)　　(1;03)［6.17-7］
T：ウァーン　ウァーン
母：痛かったの↑⑤　どこ痛かった↑⑥
T：ゴーン
母：あ、そこ　痛かったの↓⑦ だいじょうぶ、だいじょうぶ。こっちにいらっしゃい。

注1　(1;04)は、子の月齢、1歳4ヵ月を示す。1歳期のデータは、国立国語研究所(1982a)『幼児のことば資料(3) 1歳児のことばの記録』に記載されたもの。以下、同様。
注2　[7.16-39]は、1歳期の資料、国立国語研究所(1982a)の7月16日カード番号39にある用例であることを示す。以下、同様。

T児1歳11カ月

T児が自ら「イタイ」と発話し始めたころ）のやりとりの例。母は、T児の「イタイ」を何度も繰り返して、発話する。

(3)　　(1;11)［2.23-7］
T：イタイ　　母：どこ痛いの↑①
T：ウン　　母：どこ
T：ウン　ユビ　母：指痛いの↑②見せてごらん、指
T：ユビ　　母：指どうしたの
T：イタイ　　母：痛いの↑③
T：ココ　　母：そこ　見せてごらん
　　あら　痛い痛い↓④　ほんと
T：マッカ　　母：まっかなの　ちょっと赤くなってるね。赤い赤い。ばい菌が少しはいったのかしら
T：バインギ　　母：うん　大丈夫よ大丈夫大丈夫たいしたことない　うん　ここをひっぱると痛い痛いなるの⑤
（中略）
T：ココ　　母：うん　そこはどうしたの
T：ショコ　　母:そこどうしたの 指どうしたの
T：ウン　　母：あ、ここ　うーんしたら
　　痛い痛いなったの↑⑥
T：ウン　　母：そうお　さ行きましょ　下へ
T：ココイタイ　母：そう 指痛いしたの↓⑦
T：ココ　　母：うん
T：ココ　　母：うん　そこ痛いの↑⑧
T：ショコ　　母：はい　おんりして
　　いらっしゃい
T：ココ　イタイ　母：そう
T：ココ　イタイ　母：はい はい　（中略）
T：ココ　イタイ　母:はい これをじゃはっておきましょう。うん　バン。
（中略）
T：マータ　イタイイタイ　母：また痛い痛い↑ ⑨
T：ウン　　母：はるのがおもしろいんでしょあなたは。もうよくなってるわよ

T児が1歳の段階では、母がTの痛みに言及する形式は、「痛い」「痛いの」「どこが痛いの」という形式、上昇、下降イントネーションの組み合わせが混在している。

1歳8カ月に、T児が自ら「イタイ」と発話するようになると、量的な変化が生じる。確認したり、質問するために、母はこのような発話を何度も繰り返すという現象が見られた。母は、そうしながら、「イタイ」という重要語彙をインプットしていると考えられる。また、母は、T児の痛みという内面の感覚に寄り添い、それを共有し、子の不快、不安を取り除く姿勢を子に対して強く示している。この時の両者は、間主観的な重なりを持とうとしていると思われる。母が対成人の日本語文法のルールを破って、Tの痛みを「痛い↓」と言うのは、母側の間主観的態度を現す証拠となる。

Tは、自分の「イタイ」という発話によって（泣

き声と同様)、母の寄り添いを得られると学習し、それを甘えの道具としても用いるようになる。しかし、母のほうも。日々のやり取りの中で、T の戦略を学習し、(3)のような寄り添いの態度、間主観性を徐々に見せなくなる。次の(4)(5)のやりとりには、それがよく現れている。

T 児 3 歳後期のやりとりの例

（4）　　(3;08) [3;8-64]

T：アノネ　ソレデネ

母:じゃ歯をみがきましょう。歯をみがきましょう。

T：イタ イタイ イタイ

母：そうでしょ。そんなふうにあばれるからよ。

T：キャキャキャ

母：どうしたのよ。一人で自分でここにぶつけたんでしょう。

T：ウン　ソウダヨ。

母：しょうがないじゃない。よしなさい。

（5）　　(3;06) [3;6-83]

T：オナカガ　イタイ

母：お腹が痛いの↑①

T：ウン

母：お腹すいたのかしら。じゃ、朝ごはんにしましょうか。

T：オナカガ　イタイノ。

母：どうすればいい？　じゃあ。

T：オクスリ。

母：お薬飲めばいいの？どんなおくすり？

たーちゃんの飲むお薬ないわよ。困りましたねー。

T 児の痛みに言及する母の発話形式の、質と量、両面におけるこのような変化は、子の成長に伴って変化することを示している。さらに言うならば、日本語を使う日本人の母子が心理的に自他分離を進行させるプロセスを示す現象の一つと捉えることが可能なのではないだろうか。

【参考文献】

岡本依子・菅野幸恵・川田学・亀井美弥子・東海林麗香・八木下(川田)暁子・高橋千枝・青木弥生・石川あゆち(2014).「前言語期の親子コミュニケーションにみられる代弁」『湘北紀要』35 湘北短期大学 pp.67-84

鯨岡峻(1997).『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房

鯨岡峻(2006).『ひとがひとをわかるということ間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房

国立国語研究所(1982a).『国立国語研究所・言語教育研究部資料　幼児のことば資料(3) 1 歳児のことばの記録』秀英出版

国立国語研究所(1982b).『国立国語研究所・言語教育研究部資料　幼児のことば資料(4) 2 歳児のことばの記録』秀英出版

国立国語研究所(1983a).『国立国語研究所・言語教育研究部資料　幼児のことば資料(5) 3 歳前半のことばの記録』秀英出版

国立国語研究所(1983b).『国立国語研究所・言語教育研究部資料　幼児のことば資料(6) 3 歳後半のことばの記録』秀英出版

財部盛久(2023)「保育現場における ASD 児の痛みの表出事例」『日本発達心理学会第３４回大会発表論文集』p.77

永須実香(2020).「ある 2 歳児とその母によるノ文の使用実態に関する研究」『Lingua』第 31 号 上智大学言語教育研究センター　pp.71-88

永須実香(2022).「ある母が乳幼児期の子に対して用いたノ文に関する報告」『Lingua』第 33 号 上智大学言語教育研究センター　pp.21-38

仁田義雄(2014).「形容詞 1」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店

浜田寿美男(1995).『意味から言葉へ－物語の生まれるまえに』ミネルヴァ書房

宮田 Susanne(2012). CHILDES 日本語版: 日本語用 CHILDES マニュアル available at:<http://www2.aasa.ac.jp/people/smiyata/CHILDESmanual/chapter01.html>

山田洋子(1982).「0～2 歳における要求－拒否と自己の発達」『教育心理学研究』第 30 巻第 2 号 pp.38-48

MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk.* Third Edition. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates